

全青協会長に黒田氏 矢野氏以来、十勝2人目

2014年3月14日

全国農協青年組織協議会（JA全青協）の臨時総会が13日、東京都内で開かれ、道農協青年部協議会（JA道青協）の黒田栄継（よしつぐ）会長（37）＝JAめむろ＝が2014年度の会長に決まった。道内出身では5人目。十勝では1975年度に会長を務めた矢野征男氏（元ホクレン会長、元JAめむろ組合長）以来2人目。

JA全青協は、46都道府県の20歳から45歳くらいまでの青年農業者が加入する農業青年組織で構成。会長と副会長は総会で、全国の代表46人の無記名投票で選ばれる。正式な就任はその年の5月。任期1年。

会長には、JA全青協東北・北海道ブロックの理事を務める黒田氏と、現副会長の益子丈弘氏（栃木県農協青年部連盟委員長）が立候補していた。獲得票数は非公表。

黒田氏は76年、芽室町生まれ。同町上伏古で畑作を営

む。帯広柏葉高校、愛媛大教育学部卒。07年JAめむろ青年部長、09年に十勝地区農協青年部協議会会長。12年にJA道青協会長に就き、ホームステイ受け入れなど農村と都市をつなぐ食育活動に力を入れている。

黒田氏は「身が引き締まる思い。担い手減少などの課題がある中で、青年組織の役割は大きくなる。農政が激動の時期だからこそ、農業青年が自らの経営、農村を支えていきたい」と話している。

JA全青協会長の黒田栄継さん（38）に聞く 食と命の大切さ、国民と共有する先頭へ

2014年3月24日

芽室町内の畑作農家、黒田栄継さん（38）が全国農協青年部組織協議会（JA全青協）の新会長に選ばれた。十勝からは2人目のJA全青協会長となる黒田さんに、抱負や目標などを聞いた。



<<くろだ・よしつぐ>>
1976年芽室町生まれ。同町上伏古の26㍓の畑で小麦、豆、ジャガイモ、ナガイモなどを作る。帯広柏葉高校、愛媛大教育学部卒。2007年JAめむろ青年部長、09年十勝地区農協青年部協議会会長、12年に北海道農協青年部協議会会長。夫人は栄養士として働く真妃さん（42）。農場は弟の繁樹さん（35）と共同経営。

勝の仲間と京都の坂本龍馬の墓を訪れて誓った。経済成長は確かに大事だが、生きることを豊かにするための1つの方法。経済成長自体が目的になっては大切なものを見失う。私たち命を育てる仕事をしている人間が、食や命の大切さを伝えていかないと。

－会長選挙で訴えたことは。

JA全青協は政策集「ポリシーブック」を作って政策提言し、自分たちの行動目標にしている。その取り組みを見詰め直し、国民としっかりつながろうと呼び掛けた。農政はもちろん大事。さらに、これまでの農作業体験のような「食農教育」でいいのか、もっと教育分野にアプローチできるのではと訴えた。

教育は農政とかけ離れたことではない。国民の理解が得られなければ、農政は成り立たない。農業者がどんなに訴えても、正しくても国民に届かない。私たち農業団体はそれに気付くべきだ。米価闘争や貿易交渉で拳を突き上げて訴えても、国民に届かなかったのはなぜかを考えないと。この訴えは理解を得られたと思う。

－農政への訴えは。

最近の農政は、生産現場と遠い場所で議論されてきた感がある。現場の状況や意見が積み上げられた農政を求めていく。現場の意見を私たちも届けていく。食料自給率の向上に具体的にどう取り組むか。国民にとって、食

若い農業者の思い一つに

－抱負を。

自分たちが何をすべきか考え、自ら行動する組織にしていきたい。これからの農業の担い手である若い私たちが、全力でやるべきことをやる。全国の青年農業者が思いを一つにできる環境をつくる。

－これまでの取り組みをどう生かすか。

北海道では、特に都市と農村をつなげる取り組みに力を入れてきた。子供、教員、消費者の農村ホームステイなど良い結果も出ている。全国でも取り組みたい。わが国の食、命、生きることの価値観を変えていきたい。十